



さんが

第一三一号

令和 八年

西暦 二〇二六年

秋 彼岸 九月 号

曹洞宗 東運寺

京都市伏見区淀新町六一八一

TEL 〇七五-六三一-二二七二

FAX 六三一-五七二五

E-MAIL sanga@tounji.net

修証義の話し

(2)

前回に引き続き、第一章

「総序」のお言葉です。

人身得ること難し、仏法値うことまれなり。

最勝の善身を徒（いたず）らにして、
露命を無常の風に任することなかれ。

ここでは、人間に生まれ、仏さまのみ教えに触れられる幸せについて、お伝えになっています。

いま、仏さまのみ教えに触れて安心できるのは、じつは、人の力の及ばない縁からもたらされていること。そして、その安心を、手放してしまうような生き方は、慎まなければならないというお言葉です。

思えば私たちは、選ぶこともできずに、この世に生まれてきました。どんなに望んでも、好きな時代や場所

に、生まれ直すことはできません。
それなのに、修証義ではこの世でのわが身を、「最勝の善身」だと説いています。

これは、古来より人は何度も人生をくり返して生きていく、という輪廻の信仰が元になっています。

ここから学ぶことはふたつあります。
ひとつは、この世に生まれたのは、自分にはわからないままにも、それまでに積み重なってきた善行のおかげであること。

もうひとつは、思い通りに生まれたわけではないにせよ、この世に生まれたからには、みんなその場で生きていつている、ということです。幸せであれ、苦しみであれ、自分の人生を、ほかの誰かと交代してはもらえないのです。

そして仏教では、誰とも代えられないからこそ、たいせつなのだと言います。代われないことを引き受ける、

そんな気持ちが持てるようになれば、今が「最勝の善身」であるという安心に、必ずつながるのです。

とはいえ、それは「露命」でもあります。災害や事故のニュースを見るにつけ、思わぬことで、命を終えてしまうのだと実感します。

そんな露のような命をたいせつにできず、うかうかと軽んじて生きてしまったり、もしくは、まわりから軽んじさせられる生き方になってしまったりするのは、とても残念なことです。

誰もが自分の人生を大事に、引き受けていることに思いを馳せ、お互いに敬意を持てる社会であって欲しいと、切に願っています。

次回は来春の号の予定です



秋の団参のご案内

恒例の参拝旅行、今年は岐阜県方面です。

恵那の名刹長國寺さまに参拝し、奥飛騨温泉に宿泊します。

日時 11月18日（水）～19日（木）
宿泊 奥飛騨温泉「ガーデンホテル焼岳」
参加費 三五、〇〇〇円

締め切りは9月末日です。

募集のパンフレットこちらから↓



秋のお彼岸法要

23日午前10時からです

秋分の日、いつものようにお勤めいたします。お彼岸にあたり、ご先祖さまに思いを馳せ、本堂にてご焼香いただける法要に、ぜひお越しください。

お彼岸にお参りくださったご縁が、毎日をごす力の、元となりますように願っています。



↑ ホームページ



↑ お寺の日常

東運寺ホームページは→

京都 東運寺

検索